

かに多くの仁慈に浴したとしても、いかに高き地位、いかに花々しい名聲、いかに多くのその他のものを享受したとしても、いかに……」そこで彼の聲は震へはじめた。「いかにこれらすべてのものが、たゞたゞ諸君にのみ負ふところのものであるか、深く肝に銘じて已まないであります！」彼の皺深い顔は一そう皺だらけになつた。彼はすゝり上げて泣き出した。涙がその目がしらに浮かんだ。「いかに本職は心の底から、偽りなき熱烈な感謝の念を、諸君に捧げたいと思ひます……」

コズローフスキイはそれ以上言葉が出なかつた。彼は起ち上がつて、將校たちを抱擁しはじめた。公爵夫人は手巾で顔を隠した。セミヨン・ミハイロビッチ公爵は口をゆがめながら、目をしばたき始めた。多くの將校たちもやはり涙ぐんで來た。餘りよくコズローフスキイを知らなかつたブツレルも、同様に涙を抑へることが出来なかつた。この場の光景がすっかり氣に入つたのである。それからバリーチンスキイ、ブロンツォーフをはじめとして、その他の將卒の健康のために、祝盃が擧げられた。そして客人達は飲み乾した酒と、いつもの感じ易い軍人式熱情に酔はされて、宴會の席から出て行つた。

その日は申し分のない、静かでうららかな日和で、空氣は爽やかに爽々しかつた。到るところに焚き火のぼち／＼燃える音がして、歌の聲が聞こえてゐた。まるですべての人が、何かを祝つてゐるやうであつた。ブツレルはこの上なく幸福な、感激に満ちた氣持ちで、ポルトラーツキイのと

ころへ行つた。ポルトラーツキイの家には將校達が集まつて、歌留多卓を擡げた。そして副官が百ループリはつて、銀行をはじめた。ブツレルは、すぼんのかくしの中に財布を握つたまゝ、二度ばかり天幕の外へ出たが、たうとう我慢し切れなくて、決して勝負はしないと、自分にも兄弟にも誓つたにも拘らず、札に金を賭けはじめた。

それから一時間も経たないうちに、ブツレルは眞赤な顔をして汗みどろになり、體ぢう白墨で眞白に汚れたまゝ、卓子の上に兩肘を突きながら、角のくしやくしやになつた歌留多の裏に、自分の賭け高を數字に書いてゐた。もう彼はしこたま負けてしまつたので、そこに記入されてゐる自分の負債を勘定するのが、恐ろしいくらゐであつた。もつとも、彼は勘定しないでも分かつてゐた。俸給は全部前借しても、馬を賣り飛ばしても、この見知らぬ副官が記入した負債の金額を、拂ひ切ることが出来なかつたのである。彼はまだまだ勝負を續けるところであつたが、副官はむづかしい顔つきをしながら、眞つ白な綺麗な手に持つてゐた歌留多を下に置き、白墨で書いたブツレルの負け高を勘定しはじめた。ブツレルはさも極まりわるさうに、今すぐ負けた金を全部拂ふことは出来ないから、あとで家から届ける、と言ひ譯をはじめた。彼がかう言つた時、一同は氣の毒さうな顔をした。ポルトラーツキイでさへ、彼の視線を避けようとしてゐるのに氣が附いた。それは彼にとつて最後の晩であつた。こんな勝負などはじめないで、招待を受けてゐるブロンツォーフの所

へ行きさへすれば、何もかも無事だったらうに、と彼は思った。けれど今は無事でないどころか、恐ろしい羽目になつてしまつたのである。

同僚や知人に別れを告げて、彼は家へ歸つた。歸るとすぐ横になつて、普通歌留多に負けた人々の例として、十八時間ぶつづけに睡つた。マリヤ・ドミートリエヴナは、彼が「見送りのコサックに心附けてやるのだから」と言つて、五十カペイカ無心したことだの、彼の沈んだ顔つきだの、ぶつきら棒な返辭などから推して、歌留多に負けたのだなと察した。彼女は、なぜブットレルに休暇などやつたのかと、イヴン・マトエーギツチに食つてかかつた。

翌日、ブットレルは十一時過ぎに目を醒ました。彼は自分の立場を思ひ出すが早いのか、再び今までの忘却の淵へ潜り込まうとしたけれど、もうそれは出来なかつた。あの見知らぬ副官に借りてゐる四百七十七ルーブリを返すために、何とか方法を講じなければならなかつた。その一つとしては、兄に手紙を書いて、自分の不始末に對する悔悟の意を示し、兄弟の共有となつてゐる水車場の勘定から、五百ルーブリだけ最後の送金をするやうに、頼むことであつた。それから、彼は吝嗇な親戚の婦人に手紙を書いて、利子は幾らでも望み通り出すから、五百ルーブリ送つてくれと無心してやつた。そのあとで、彼はイヴン・マトエーギツチのところへ行つて、少佐自身、といふより、寧ろマリヤ・ドミートリエヴナの手許に、金があるだらうと見込みをつけて、五百ルーブリ融通してく

れと頼んだ。

『おれはすぐにも貸してやるんだが、』とイヴン・マトエーギツチが言つた。『しかしマーシャが出しやすまいよ。どうもあの、女といふ奴は、しやうのない握り屋だからな、厭になつちまふ。しかし何とかして、この急場を通れなくちやならんな、困つたな……あの酒保の畜生が持つとらんかな？』

けれど、酒保に借りるなどといふことは、考へるまでもなかつた。かういふわけで、ブットレルの救ひはたゞ兄か、それとも吝嗇な親戚の婦人から来るよりほか、もう當てがないこととなつた。

### 二二二

チエチニヤで自分の目的を果たさなかつたので、ハチ・ムラートはチフリスへ引き返した。そして毎日のやうに、ブロンツォーフの所へ訪ねて行つて、面會を許される度に、どうか山匪の捕虜を集めて、それを自分の家族と交換するやうに依頼した。さうして貰はないうちは、自分の手足が縛られてゐるも同然で、思ふやうに露西亞軍に仕へて、シャミールを滅ぼすことが出来ない、と言つた。ブロンツォーフは出来るだけの事をする、漠然とした約束をするだけで、アルグチンスキイ將軍がチフリスへやつて來たら、この人とよく相談した上、はつきり事態を決するからと、一日延

ばしにしてゐた。その時ハチ・ムラートは、ヌーフといふ高架索の小さな町へ行つて、そこで暫く暮らさせてくれと、ブロンツォーフに許可を乞ひはじめた。そこにゐた方が、シャミールをはじめその臣下の人々と、自分の家族に關する交渉をするのに、便宜が多いと考へたのである。そればかりでなく、このヌーフといふ回々教の町には、この教への寺があつたので、回々教の掟が要求する祈禱を行ふのにも、はるかに便利がよいのであつた。ブロンツォーフはこのことを書面で、ペテルブルグへ相談してやつたが、それにも拘らず、とにかくハチ・ムラートに、ヌーフ行きを許可したのである。ブロンツォーフやペテルブルグの當局、それからまた一般に、ハチ・ムラートの事件を知つてゐる露西亞人全部の目から見ると、この事件は高架索戦争に於ける喜ぶべき轉機として、或は單に興味ある一偶發事件として映つたばかりであるが、ハチ・ムラートにとつては、恐るべき全生涯の轉回であつた（殊に最近に至つてその感が深かつた）。彼は一面に於て自己を救ふために、また一面に於ては、シャミールに對する憎惡のために、山地から逃げ出したのである、この闘争はかなり困難なものであつたけれど、とにかく彼は目的を達したので、始めの間はこの成功が彼を喜ばした。彼は眞剣にシャミール攻撃の作戦を考量した。けれど、容易に實行出来ると思つてゐた家族の脱出が、豫想以上に困難なのが分かつた。シャミールは彼の家族を捉へて捕虜とし、女達を各部落へ引き渡し、息子を盲にするか殺してしまふと威嚇した。で、今度ハチ・ムラートはヌーフへ行つて、

ダゲスタンにゐる自分の味方を通じて、カブクか計略によつて、家族をシャミールの手から奪回しようとしてた。ヌーフで彼の所へ來た最後の斥候は、次ぎのやうな情報を齎らした。彼に心服してゐるアヴール人は彼の家族を奪つて、一緒に露西亞軍の中へ投じようと謀らんでゐるが、それを企ててゐる人々が餘り小人數なので、家族の監禁されてゐるエヂェノでは、それを實現することがむづかしい。従つて家族がエヂェノから、他の土地へ移されるやうなことがあつたら、そのとき道に擁して奪ひ取らうといふのである。ハチ・ムラートは家族を救ひ出した者には、三千ルーブリの褒美をやると、味方の人々に觸れ出させた。

ヌーフでは五間からなるさゝやかな家が、ハチ・ムラートの住まひに當てられた。それは回教寺院と汗の宮殿から、程遠からぬところであつた。彼に附けられた將校達も、通辯も、護衛者も、みな同じ家に住まつてゐた。ハチ・ムラートの生活は、山地から來る斥候の期待とその應接、それから當局の許可を得てゐる郊外の遠乗り、などによつて過ごされた。四月八日、遠乗りから歸つて來たハチ・ムラートは、留守にブロンツォーフの部下がチフリスから來た、と知らされた。この官吏が齎らした報知を聞きたい氣持ちは、山々であつたけれど、ハチ・ムラートは警部と官吏が待つてゐる部屋へ行く前に、まづ自分の部屋へ入つて、正午の祈禱にかかつた。祈禱を済ますと、彼は客間と應接室になつてゐる、次ぎの部屋へ出て行つた。チフリスからやつて來た官吏は、四等官のキリー

ロフといふ男であつたが、ハチ・ムラートに向かつて、十二日までにアルグチンスキイとの會見のために、チフリスへ来て貰ひたいといふ、ブロンツォーフの希望を傳へた。

『ヤクシー(よる)』とハチ・ムラートは腹立たしげに言つた。

官吏のキリーロフが彼の氣に入らなかつたのである。

『ところで、金は持つて来たか?』

『持つて来ました。』とキリーロフは言つた。

『今日から二週間分だ。』とハチ・ムラートは言つて、十本の指を並べて見せ、それから更に四本を出して見せた。『さあ、よこしなさい。』

『すぐ出してあげます。』旅行鞆の中から金入れを出しながら、官吏はかう言つた。『一たい何に金が必要なんだらう?』ハチ・ムラートに分かるまいと思つて、彼は露西亞語で呟いたが、ハチ・ムラートはちやんと分かつてゐたので、腹立たしげにキリーロフを睨んだ。キリーロフは金を取り出しながら、チフリスへ歸つてから公府に報告の材料を作るために、ハチ・ムラートと言葉が交じへたくなつた。彼は通辯を介して、ここは退屈ではないか、と尋ねた。ハチ・ムラートは、文官服を著した小柄な肥つた男を、蔑すむやうにちらつと横目で見たまゝ、何んとも返辭をしなかつた。通辯は問ひを繰り返した。

『わたしはこの男と話しをしたくないんだから、さう言つてくれ、はやく金を出してもらひたい。』かう言ひ終ると、ハチ・ムラートはまた卓子の前に腰をおろして、金の勘定をする身構へをした。

キリーロフは金貨を取り出して、十枚づつ棒にした包みを七本並べて(ハチ・ムラートは、日に銀貨五枚づつ支給されてゐた)、それをハチ・ムラートの方へ押しやつた。ハチ・ムラートはチェルケス外套の袖に金貨を抛り込むと、やをら身を起して、急に思ひがけなく、四等官の禿げ頭を軽くびしやりと叩いたまゝ、ぶいと部屋を出て行かうとした。四等官は躍り上がつて、あの男はこんなことをする権利など持つてゐない、自分は太佐相當官なのだから、と通辯に申し入れさせた。警部もそれに相槌を打つた。けれどハチ・ムラートは、萬事承知してゐる、といふ風に一つ領めて、部屋から出てしまつた。

『どうもああいふ人間は仕方がない。』と警部は言つた。『結局、短刀でぶすりとやるくらゐが落ちですよ。ああいふ手合ひを相手に話しなんか出来ませんよ。どうもだん／＼氣が變になつてくるらしいですね。』

日がとつぶり暮れるや否や、頭巾で目の邊まで顔をかくした二人の斥候が、山からやつて来た。警部はそれをハチ・ムラートの部屋へ連れて来た。斥候の一人は色の黒い肉附きのいいタウリヤ人で、今一人は瘦せた老人であつた。この二人が齎らした情報は、ハチ・ムラートにとつて、喜ば

しいものではなかつた。彼の家族を救ひ出さうとした友人たちも、今ではすつかり手を引いて了つた。それはハチ・ムラートに力を藉すものを、思ひ切つて極刑に處するといふ、シャミールの威嚇を恐れるからであつた。

斥候の物語を聞き終ると、ハチ・ムラートは組み合はせた足の上に、兩の肘を突いて、毛皮帽子を被つた頭を垂れ、長いあひだ沈黙を守つてゐた。ハチ・ムラートは思案してゐた。決定的に思案してゐた。彼は今これが最後の思案で、何らかの決心が必要だといふことを、自分でも承知してゐた。ハチ・ムラートは頭を上げた。そして金貨を一枚取り出して、それを一枚づつ斥候に渡したのち、かう言つた。

『行け。』

『返事は何と申しませう？』

『返事は神の御心のまゝだ。行け。』

斥候は起ち上がつて、出て行つた。ハチ・ムラートは膝の上に兩肘を突いたまゝ、毛氈の上に坐りつゞけてゐた。彼は長い間かうして坐つたまゝ、じつと考へてゐた。

「どうしたものだらう？ シャミールを信じて、彼のところへ歸つたものだらうか？」とハチ・ムラートは考へた。「あいつは狐のやうな奴だから、おれを瞞すに違ひない。たとへ瞞さないにして

も、あの赤毛の古狐に屈服することは不可能だ。なぜといつて、一旦おれが露西亞軍に投じた今となつては、もうおれを信用しないに決まつてゐるからだ。』とハチ・ムラートは考へた。

彼はタウリヤの或る昔話を思ひ出した。一羽の鷹が獵師につかまつて、しばらく人間のあひだに暮らしてゐたが、やがて山の仲間の所へ歸つて來た、彼は歸つては來たけれど、脚には紐が縛りつけられたまゝで、紐には鈴が残つてゐた。仲間の鷹は彼を受けつけなかつた。『飛んで行け。』と彼等は言つた。『その銀の鈴を附けて貰つたところへ歸るがいい。おれたちの仲間には鈴もなければ、紐もないのだから。』けれど鷹は故郷を見捨てたくなかつたので、そのまゝそこに踏み止まつた。しかし、ほかの鷹が彼を仲間に入れないで、到頭つゞき殺してしまつた。

「おれもそれと同じやうに、つゞき殺されるだらう。」とハチ・ムラートは考へた。

「ではこゝに残らうか？ 露西亞皇帝のために高架索を征服して、名譽と官位と富みを擱むことにしようか？」

「それは出来ることだ。」チロンツォーフとの會見や、その愛想のいい言葉を思ひ出しながら、彼はかう考へた。

「しかし、すぐに決心しなけりやならない。でなければ、あいつが家族をみな殺しにしてさふ。ハチ・ムラートは夜つびて睡らずに、考へ明かした。

ちやうど眞夜中頃、いよいよ彼の決心がついた。彼は山の中へ逃げ込んで、自分に心服してゐるアフリヤ人と一緒に、エチエノへ闖入し、その場に討ち死にするか、家族を救ひ出すか、運を天に任さうと決心した。しかし、家族を連れて露西亞軍に投ずるか、それともフンザフへ遁れて、そこでシャミールと戦ふか——その點はハチ・ムラートも決心がつかなくかつた。たゞさし當り露西亞軍を去つて、山中へ遁れねばならぬ、といふことだけ分つてゐた。で、彼は早速この決心の實行にかかつた。彼は枕の下から綿入れの下、著を取り出して、從者たちの寢てゐる部屋へ行つた。彼等は玄關を隔てて向かう側にゐた。彼が戸を開け放した玄關に出るが早いか、露を含んだ月夜の空氣が彼の體を裹み、家に接した庭で鳴いてゐる、鶯の甲高い聲が耳朶を打つた。

ハチ・ムラートは玄關を通り抜けて、從者たちの寢てゐる部屋の戸を明けた。部屋の中には明かりがなくて、たゞ窓から細い新月が、微に射し込んでゐるばかりであつた。卓子と二脚の椅子が脇の方に片寄せられて、四人の從者は四人とも、毛氈や外套の上にごろ寝してゐた。ハネーフィは馬と一緒に庭で寢てゐた。ガムザローは戸のきしみを聞きつけると、起き上がつて、ハチ・ムラートの方を見た。そして主人の顔を見分けると、再び横になつた。その傍に寢てゐたエルダールは、い

きなり跳び起きて、下著を著ながら、命令を待つてゐた。クルバント・ハン・マゴーマは睡つてゐた。ハチ・ムラートは下著を卓子の上に置いた。すると下著は、何か卓子の板にぶつつかると堅い音を立てた。それは中に縫ひ込んである金貨であつた。

『これも縫ひ込んで置け。』けふ受け取つた金貨をエルダールに渡しながら、ハチ・ムラートはかう言つた。エルダールは金貨を受け取ると、すぐに明かるい場所へ行つて、短劍の小柄を取り出し、下著の裏を解きはじめた。ガムザローは身を起こして、胡座を組みながら坐つた。

『ガムザロー、お前は若い者どもに、銃やピストルを調べて、彈藥の用意をして置くやうに言ひつける。明日は遠方へ出かけるのだから。』とハチ・ムラートは言つた。

『彈丸もあります。火藥もあります。準備はすぐに出来ます。』とガムザローは言つて、何か譯の分からぬことを唸つた。ガムザローは、なぜハチ・ムラートが銃の装填を命じたのか、そのわけを悟つた。彼はそも／＼の始めから、たゞ一つのことしか望んでゐなかつた。しかもその希望は、時が經つに従つて、次第に募つて行くのであつた。ほかでもない、出来るだけたくさん露西亞の犬を斬り殺して、山の中へ逃げ歸ることであつた。今ハチ・ムラートも、それと同じことを望んでゐるのを見て、彼はわが得を意たり、といふやうな顔をしてゐた。

ハチ・ムラートが出て行つた時、ガムザードは仲間を叩き起こした。そして四人がかりで夜つびて銃や、ピストルや、引き金や、燧石などを改めたり、薬池へ新しい火薬を入れたり、火薬を填めて油紙に包んだ弾丸を、胸の薬筒入へ挿し込んだり、刀や短剣を磨いたり、刀身に油を塗つたりした。

夜明け前にハチ・ムラートは、齋戒沐浴に使ふ水を汲みに、再び玄關へ出て行つた。玄關ではゆるべよりもつと朗らかな澄んだ聲で、しのゝめに歌ひ競ふ鶯の囀りが聞こえた。従者たちの部屋では、短剣を石に當てて研ぐ、規則正しい鋼の音がしゅつ／＼と聞こえた。ハチ・ムラートは桶から水を汲み取つて、自分の戸口に近づいた時、従者たちの部屋から刃物を研ぐ音のほかに、ハチ・ムラートの耳に聞き馴れた歌を歌ふ、ハネーフィの細い聲が聞こえた。ハチ・ムラートは立ち停まつて、耳を傾けた。歌の大意はかういふのであつた。勇士ガムザードが部下の若者たちと一緒に、白馬の一群を露西亞側から掠奪して、山の方へ追つてゐたところ、テレク河の彼方で露西亞の公爵が彼等を追ひつめ、大軍をもつて林のやうにガムザードを取巻いた。そのときガムザードは馬を悉く斬り殺し、その死骸を高く積み上げた血みどろの堡壘の影に、部下の勇士たちと共に立て籠もり、小銃に弾丸の残つてゐる限り、腰に短刀の吊られてゐる限り、血管に血の流れてゐる限り、露西亞人と戦ひつゞけた。けれど、いよ／＼討ち死にする前に、ガムザードは空に一群の鳥を見つけて、かう呼びかけた。『あゝ渡り鳥、お前たちはわれらの家へ飛んで行つて、われらの姉妹や、母や、

色白き乙女らに、われら一同が異端との戦ひに討ち死にしたと告げてくれ。われらの骸は墓の中に安らげく横たはるのではなくて、貪婪な狼の群れに肉を割き骨を嚙まれ、黒い鳥に目を剝り出されるのだと言つてくれ。』

これらの言葉で歌は終はつてゐた。沈んだ節廻はして歌はれたこの最後の二節に、快活なハン・マゴーマの勇ましげな聲が加はつた。彼は歌の最後に大きな聲で、『リヤ、イリヤーフ、イリ、アラ！』と叫びながら、絹を裂くやうな鋭い調子で意味のない叫びを立てた。やがて、あたりはしんと静まつた。再び庭から響いて来る鶯の囀りと、刀の砥石に觸れ合ふ規則たゞしい響きが、戸の蔭から洩れて聞こえるばかりであつた。

ハチ・ムラートはすつかり考へこんで了つたので、水がこぼれるほど水差しを傾けたのに、気がつかないほどであつた。彼は自分で自分を嘲けるやうに首を振つて、居間へ入つて行つた。朝の淨めを済ませた後、ハチ・ムラートは武器を改めて、寢床の上に坐つた。もう何もすることはなかつた。馬に乗つて出かけるためには、付き添ひの許しを受けなければならなかつた。けれど外はまだ暖かつたので、付き添ひは睡つてゐた。

ハネーフィの歌は、もう一つの歌を想ひ起こさせた。それは彼の母親の作で、本當にあつた出来事を歌つたものである。その出来事といふのは、ハチ・ムラートが生まれてから、間もなく起こつ

た事である。彼は母から始終それを話して聞かされてゐた。

歌は次ぎのやうなものである。

『おん身の刃はわが白き肌を裂きぬ。されども我はいとし子をその傷口に押し當てて、己れが熱き血潮もて吾子の身をしとど濡らしぬ。やがて痛手は草根の力も藉らず癒え果てて、吾子は生ひ立ち勇士となりぬ。』

この歌詞は、ハチ・ムラートの父に向けられてゐるのであつた。歌の意味はほかでもない。ハチ・ムラートが生まれた時、汗の妻もウンマ・ハンといふ男の子を生んで、ハチ・ムラートの母を乳母に召し寄せた。ハチ・ムラートの母は、汗の長子アブヌツァール・ハンをも育て上げたのである。けれどパチマートは、わが子を手離したくなかつたので、行くのはいやだと言つた。ハチ・ムラートの父は立腹して、せひ行くやうに命じた。パチマートが再びそれを拒んだ時、夫は彼女を短刀で突いた。もし傍の者が彼女を連れて逃げなかつたら、彼女は殺されたに違ひないのである。かうして、パチマートはわが子を手離さずに育て上げた——つまりこのことを歌つた歌なのである。

ハチ・ムラートは母のことを想ひ起こした。彼女は小家の屋根の上で、毛皮外套を被りながら、わが子を抱いて寝せつけようとしながら、この歌を歌つたものである。彼はよく、傷あとの残つてゐる脇腹を見せてくれと頼んだ。彼は母の生き生きした姿を、さながら目のあたり見るやうな氣持

ちがした——それはこんど山に置いて來た皺だらけな、白髪頭の、齒と齒の間に隙きまのある老婆ではなくて、若くて美しい、しかも力の強い、女盛りの母であつた。そのころ彼はもう五つになつて、かなり重かつたけれど、彼女はわが子を籠に入れて、脊中に縛りつけ、山越えして祖母のところへ行つたものである。

それからまた彼は白い髯を生やした、皺の深い祖父をも思ひ出した。彼は筋ばつた手で銀を打ちながら、よく孫に祈禱を唱へさせた。山の下には泉が噴いてゐて、彼は母の白い股引につかまりながら、一緒にそこへ水汲みに行つた。それから、よく彼の顔を嘗めた瘦せ犬も、記憶に浮かんだ。取り分け母と一緒に納屋へ行つた時、そこに立ち望めてゐる煙と、酸乳の匂ひがまさ／＼と思ひ出された。母はそこで牛の乳を搾つて、それを沸かしてゐたのである。また始めて頭を剃りおとされた時のことを思ひ浮かべた。壁に懸かつてゐるびか／＼光る眞鍮の盆に、青々とした自分の頭が丸く映つてゐるのを見て、彼はびつくりしてしまつた。

自分の子供時代を思ひ出すと、彼は自分の愛子ユスーフのことを聯想した。この子の頭を始めて剃り落としたのは、彼自身であつたが、今ではこのユスーフが若い、美しい勇者となつてゐる。彼は最後に逢つた時のわが子の面影を心に描いた。それは彼がツェルメスを出發する當日の事だつた。息子は彼の馬を牽いて來て、見送りの許しを乞うた。彼はちやんと著替へをして、武装をと



のへ、自分の馬の手綱をとつてゐた。ユスーフの薔薇色をした若々しい美しい顔も、細つそりとした脊の高い姿全體も（彼は父よりも脊が高かつた）、勇氣と青春と生の喜びに息づいてゐた。歳が若いにも似ず幅の廣い肩、青年らしいしつかりした腰骨、すらりと長い足、長く逞しい手、一舉一動に現はれる力と強靱性と身軽さは、いつも父を喜ばせてゐた。彼はいつもわが子に見惚れてゐたのである。

「お前は残つてゐた方がいい。いま家にはお前よりほかに誰もゐないのだから、お母さんやお祖母さんを護つてくれ。」とハチ・ムラートは言つた。

ユスーフは自分の生きてゐる限り、母や祖母に誰も指一本さすことは出来ないと、満足の餘り顔を赧めながら言つた。その時の若々しい誇らしげな表情を、ハチ・ムラートは今でも憶えてゐた。それでもユスーフはやはり鞍に跨がつて、小川まで父を見送つた。そこから彼は引き返したが、それ以來ハチ・ムラートは妻も、母も、息子も見ないのである。

あゝ、この息子をシャミールは盲めくらにしようとしてゐるのだ！ 妻の受けるべき侮辱、それはもう考へて見ることさへ堪らなかつた。

かうしたもの思ひが、すつかりハチ・ムラートを興奮させて了つたので、彼はもうぢつと坐つてゐられなかつた。彼はいきなり起ち上がつて、跛をひきながら入り口に近より、戸を明けてエルダ

ールを呼んだ。太陽はまだ昇らなかつたけれど、あたりはもうすつかり明るくなつてゐた。鶯はまだ歌ひやめないでゐた。

「付き添ひのところへ行つて、散歩に行きたいからと、さう言つてくれ。そして馬に鞍を置くんだ。」と彼は言つた。

## 二四

最近ブットレルにとつて、唯一の慰藉となつてゐたものは、武人的趣味であつた。彼は軍隊勤務の時ばかりでなく、私生活でさへもそれに没頭してゐた。彼はチェルケス外套を著て、高架索風の曲乗りをしたり、二度もボグダーヌイチと一緒に伏兵に行つたりした。もつとも、二度ながら誰かと殺すことも、見附け出すことも出来なかつたけれど、この有名な勇士ボグダーヌイチに接近し、友誼的關係を保つといふことが、ブットレルには何となく愉快な、しかも重大な事のやうに思はれた。例の借金の方は、或る猶太人から恐ろしい高利で金を借りて、すつかり拂つてしまつた。つまり、それは本當に解決されない難關を、一時延期したといふに過ぎないのであつた。彼は自分の立場を考へないやうに努め、武人的趣味以外に、なほ酒で現實を忘れようとしてゐた。彼はだんだん酒量が強くなつて、一日一日と道徳的に弱くなつて行つた。いま彼はもうマリヤ・ドミートリ

エヴナに對して、美しきヨセフではなく、むしろ無作法に彼女の後を追ひ廻はすやうになつた。けれど驚いたことには、彼女から斷乎たる手強い拒絶を食らつて、すつかり赤恥ぢを搔いてしまつた。

四月の終り頃、一つの支隊が要塞へ到着した。それは從來不可能と見做されてゐた、チェチニヤ横斷を遂行するために、新しくバリヤーチンスキイが派遣したものである。その中にはカバルチヤ聯隊の二箇中隊があつた。この中隊は、當時高架索で行はれてゐた習慣に従つて、クーリン聯隊に屬する中隊から、賓客としての待遇を受けた。兵士らは各兵營に集まつて、夜食や、粥や、牛肉などを馳走になつたばかりでなく、フォートカまでも振る舞はれた。また將校たちは、將校の宿舎にそれ／＼配置された。そして一般の習はしに従つて、この土地の將校は、新たに到着した將校をもてなしたのである。

饗應は唱歌隊附きの酒盛りで終つた。イヴン・マトエーギツチはすつかり酔つぱらつて、もう赤いのを通り越して、蒼ざめた灰色の顔をしながら、椅子の上に馬乗りになつたまゝ、劍を引き抜いて、想像の敵を斬り拂ひながら、罵つたり、聲高に笑つたり、みんなと抱き合つたり、『シャミールが謀叛を起こしたが、それから幾年たつたやら、トライ・ライ・ラ・タ・タイ、それから幾年たつたやら。』といふ自分の好きな歌に合はせて、踊りを踊つたりした。ブットレルもその席に居合はせた。彼はかういふものの中に、武人的詩趣を見出さうと努めたが、心の奥底では、イヴン・マト

エーギツチが氣の毒だつた。がそれかといつて、彼を止めるのは到底不可能な事だつたので、ブットレルは頭に重苦しい酒の酔ひを感じながら、そつと部屋を出て歸途に就いた。

満月が白い小家の列や、路上の石を照らしてゐた。あたりは一面に明かるくて、路に轉がつてゐる石ころでも、藁しべでも、牛馬の糞でも、一々見分けられるほどであつた。ブットレルは家の傍まで來ると、布で頭から頸筋を包んだ、マリヤ・ドミートリエヴナに出會つた。彼女に小つびどく刎ねつけられてから以來、彼は少し極まりが悪くなつたので、なるべく彼女と顔を合はさないやうにしてゐた。けれど今は月夜で、しかも一杯飲んだ後なので、ブットレルはこの出會ひが嬉しかつた。そして、また彼女に甘えたいやうな氣持ちがした。

『あなたどこへ?』と彼は尋ねた。

『いゝえね、家のお爺さんの様子を見に行かうと思つて。』と彼女はさも隔てなさうに答へた。彼女は眞剣にきつぱりとブットレルの戀を斥けたけれど、最近かれがいつも自分を避けてゐるのが、何となく面白からず感ぜられた。

『なあに、様子なんか見ることは要りませんよ、今に歸つて來ます。』

『歸つて來るでせうか?』

『歩いて來なければ、擔がれて來ますよ。』

『それなんですよ、それがわたしいやなの。ちや、行かない方がいいでせうか?』とマリヤ・ドミトリエヴナは言った。

『さうですとも、行くのをおよしなさい。それより、家へ歸らうちやありませんか。』

マリヤ・ドミトリエヴナは踵を轉じて、ブットレルと一緒に歩き出した。月は皎々と二人を照らして、道路づたひに動いて行く影法師の頭のまはりに、後光のやうなものが見えるくらゐであつた。ブットレルはその影を見ながら女に向かつて、わたしは相變はらずあなたが好きです、といふ意味のことを言はうとしたけれど、どんな風に切り出していいか分からなかつた。彼女は、相手は何を言ひ出すかと、待つてゐた。かうして二人は無言のまゝ、もうほとんど家の傍まで近づいた時、とつぜん家の角から騎馬の人が現はれた。それは護衛兵を連れた將校であつた。

『一たい今ごろ誰だらう?』とマリヤ・ドミトリエヴナは言つて、脇の方へ片寄つた。

月は馬上の人を後から照らしてゐたので、マリヤ・ドミトリエヴナは、ほとんどすぐ傍へ来るまで、何者か見分けが附かなかつた。それは、以前イヴン・マトゼーギツチと一緒に勤めてゐた、カーメネフといふ將校であつた。マリヤ・ドミトリエヴナもこの男を知つてゐた。

『ビョートル・ニコライツチ、あなたですか?』とマリヤ・ドミトリエヴナは聲を掛けた。

『えゝさうです。』とカーメネフは言った。『やあ、ブットレル、ご機嫌よう。まだ寝なかつたんで

すか。マリヤ・ドミトリエヴナと散歩ですね? 氣をつけないと、イヴン・マトゼーギツチから目玉を頂戴しますぞ。いつたいあの人はどこですか?』

『ほら、聞こえるでせう。』太鼓や歌聲の響いて来る方を指さしながら、マリヤ・ドミトリエヴナは言つた。『騒いでるんですの。』

『それは何です、こゝの連中がやつてるんですか?』

『いや、ハサーフ・ユルトから新しい隊が來たので、つまりその宴會なんです。』

『あゝ、そりや結構だ。それちや僕も間に合ふな。實はイヴン・マトゼーギツチのところへは、ほんのちよつとお寄りしたただけなんですから。』

『何です、用事でもあるんですか?』とブットレルは尋ねた。

『なに、ちよつとした事で。』

『いいことですか、わるいことですか?』

『そりや人によつて違ひますな。われ／＼にとつてはいい事だけど、また中には、いやなことだと言ふ人もあるでせう。』とカーメネフは笑ひ出した。

このとき三人はイヴン・マトゼーギツチの家まで來てゐた。

『チヒリョフ。』とカーメネフは護衛のコサックを呼んだ。『こゝへ來い。』

ドン地方出身のコサックが一人、仲間から抜け出して、三人の傍へ近よつた。コサックは普通ドン地方の兵士が著てゐる制服を身に著け、長靴を穿き、マントを羽織つて、鞍の後に振り分けの袋を縛りつけてゐた。

『さあ、例のものを出さんか。』馬からおりながら、カーメネフはかう言つた。

コサックもやはり馬からおりて、何やら入つた袋を鞍囊の中から取り出した。カーメネフはコサックの手から袋を受け取つて、その中へ手を突込んだ。

『それぢや、あなたに珍らしいものをお目にかけますか？ びつくりしちやいけませんよ。』と彼はマリヤ・ドミートリエヴナの方へ振り向いた。

『何をびつくりする事があるでせう。』とマリヤ・ドミートリエヴナは言つた。

『さあ、これです。』とカーメネフは言つて、人間の首を取り出しながら、それを月光に翳した。『見分けがつかますか？』

それは額が高く突き出した、頭を圓く剃られてゐる生首であつた。黒い顎鬚も口鬚も短く刈り込まれ、一方の目は完全に開かれ、今一方は半開になつてゐた。綺麗に剃つた頭は、めちやくに斬られて血みどろになり、鼻の中には血が黒く塊まつてゐた。頸は血みどろの手拭ひで巻いてあつた。頭部に無数の傷を受けてゐるにも拘らず、紫色になつた唇には、子供らしい善良な表情が浮かんでゐた。

ゐた。

マリヤ・ドミートリエヴナは、ちよつとそれを眺めたのち、一口もものを言はないで、くるりと向きを変へると、足早に家の中へ入つてしまつた。

ブットレルはこの恐ろしい生首から、目を離すことが出来なかつた。それはついこの間まで、親しい會談にいく晩かを共に過ごした、かのハヂ・ムラートの首なのであつた。

『これはどうしたんです？ 誰が殺したんです？ どこで？』と彼は尋ねた。

『逃げ出さうとしたんで、引つつかまへたんですよ。』とカーメネフは言つた。そして首をコサックに渡すと、ブットレルと一緒に家に入つた。

『しかし、最期は立派なものでしたよ。』とカーメネフが言つた。

『一體どうしてそんな事になつたんです？』

『まあ、待つて下さい。イヴン・マトゼーギツチが來られたら、すつかり悉しく話しますから。實はそのためにわざ／＼派遣されたんですよ。要塞といふ要塞、村といふ村を持ち廻はつて、みんなに見せてるんです。』

イヴン・マトゼーギツチのところへは使ひが出された。やがて、へと／＼に酔つぱらつた彼は、同じやうに一杯機嫌の將校二人と一緒に、家へ歸つて來た。そして、いきなりカーメネフを抱き締

めにかかった。

『ところで、わたしは、』とカーメネフは言った。『ハチ・ムラートの首を持って来たんですよ。』  
『嘘を言へ！ 殺したのか？』

『さうです、逃げ出さうとしたんで。』

『だから、おれは手だと言つたんだよ。で、そいつはどこにあるんだ、首は？ 見せてくれ。』

そこでまたコサックが呼ばれた。彼は首の入った袋を持って来た。生首が取り出された。イヴン・マトゼーギツチは酔眼を見開いて、長い間それを見つめてゐた。

『それにしてもえらい奴だつた。』と彼は言つた。『さあ、おれが一つキスしてやらう。』  
『さうです、ほんたうに利かぬ氣の人間でしたなあ。』と將校の一人が言つた。

みんなが首を見終つてから、またコサックの手に返した。コサックはなるべく音のしないやうに、床へ置かうとつとめながら、首を袋の中へ藏つた。

『どうだね、君、カーメネフ、こいつを見せる時に、何とか勿體らしい文句でも言ふのかい？』と一人の將校が訊ねた。

『いや、おれに接吻さしてくれ、あの男はおれに劍を贈り物にしてくれたんだ。』とイヴン・マトゼーギツチは叫んだ。

ブットレルは入り口の階段へ出た。マリヤ・ドミートリエヴナはその二段目に腰を掛けてゐた。

彼女はブットレルの方を振り向くと、すぐ腹立たしげに顔を背けた。

『どうなすつたんです、マリヤ・ドミートリエヴナ？』とブットレルは尋ねた。

『あなた方はみんな人殺しです。わたしはそんな人だいきらひ。人殺しよ、本當に。』と彼女は起ち上がりながら言つた。

『誰だつてああなるかも知れないですよ。』ブットレルは、どう言つていいか分からないので、こんなことを呟いた。『それが戦争なんですよ。』

『戦争？ 何が戦争なんです？ 人殺しです——それだけのこつてですよ。死んだ人の遺骸は、ちやんと土に納めなければならぬのに、みんな面白さうにげら／＼笑つてゐる。人殺しだ、ほんたうに。』と彼女は繰り返して階段をおりと、そのまゝ裏口から家へ入つてしまつた。

ブットレルは客間へ引き返すと、事の様子を悉しく話すやうにと、カーメネフに頼んだ。  
そこでカーメネフは一切を物語つた。

それはかういふ具合であつた。

ハチ・ムラートは、町の附近を馬で乗り歩くことを許されてゐたが、しかし必らずコサックの護衛付きであつた。ヌーフにゐるコサックは、みんな五十人くらゐしかかなかつた上に、その中の十人は上官たちの従卒に採られてゐたので、もし命令通りハチ・ムラートに十人づつ附けるとすれば、そのほかの者は一日毎に出かけねばならぬ事になるのであつた。さういふわけで、はじめの日だけは、十人のコサックを護衛につけたけれど、その後五人づつ減らして、ハチ・ムラートには、自分の従者を全部つれて行かないやうに頼んだ。

けれど四月の二十五日に、ハチ・ムラートは五人の従者を全部ひき連れて散歩に出た。ハチ・ムラートが馬に乗らうとした時、司令官は五人の従者が五人とも、ハチ・ムラートに附いて行く支度をしてゐるのを見て、それは禁止されてゐると注意したけれど、ハチ・ムラートは聞かぬやうな振りをして、馬を進めた。で、司令官も強ひてとは言はなかつた。コサック達には一人の下士がついてゐた。ゲオルギイ十字章を貰つた勇士で、薄色の髪を伸ばして、ぐるりと周りを切つた、いかにも若々しい血色の、健康さうなナザーロフといふ若者であつた。彼は貧しい舊教派の家庭に長男として生まれ、早くから父に別れて、年取つた母のほか三人の妹と、二人の弟を養つてゐるのであつた。

『いいか、ナザーロフ、遠くまで出しちやいけないぞ。』と司令官は叫んだ。

『はい、隊長殿。』とナザーロフは答へた。そして肩の銃を抑へながら、鎧に兩足を掛けて、見事な體軀をしたおとなしい栗毛の去勢馬を、早足で進ませた。四人のコサックがその後から續いた。一人は痩せてひよろ長い、フェラポントフといふ仕様のない泥坊で、ガムザーロに火薬を賣りつけた男である。いま一人は、もうそろ／＼現役を終らうといふ中年の男で、岩乗な力自慢の百姓であつた。ミューシキンといふのはいつもみんなの笑ひ草になつてゐる、意氣地なしの若造であつた。それからもう一人は、白つぼい髪をしたペトラコフといふ若者で、母親の一人子であるだけに、いつも人懐つこい、陽氣な質であつた。

朝のうちは霧が深かつたけれど、晝頃に天氣が収まつて、樹々の若芽や、處女のやうに若々しい草や、芽を出したばかりの麥や、道の左に見える急流の漣にも、太陽がきら／＼と輝いてゐた。ハチ・ムラートは並み足で馬を進めた。コサックも従者も、遅れないやうにその後からついて行つた。かうして並み足のまゝ道路づたひに、要塞の外へ出た。籠を頭に載せた女や、荷馬車に乗つた兵士や、きいきい音のする牛車などに出逢つた。二里ばかり離れた時、ハチ・ムラートはカバルチヤ産の白馬に鞭を當てた。彼が急に速度を出したので、従者たちも大きな速足でその後を追つた。コサック達も同じやうにしなければならなかつた。

『あいつの乗つてゐる馬は中々の逸物ぢやないか。』とフェラポントフが言つた。『もしこれがあの男

の歸順しない時分だつたら、あの馬に乘らしちや置かないんだがなあ。」

『そりやお前、チフリスで三百ルーブリ出して買った馬だもの。』

『なに、おれはこの馬で追ひ越して見せらあ。』とナザーロフが言つた。

『そりや追ひ越せるだらうよ。』とフェラポントフが言つた。

ハチ・ムラートは次第に速度を早めた。

『おい、親友、そんなことをしちや困るよ。もつとゆつくり頼むよ！』ハチ・ムラートに追ひつきながら、ナザーロフは叫んだ。

ハチ・ムラートは後を振り向いたが、なんにも言はないで、相變はらず速度を弛めようともせず、さつさと馬を追ひつづけた。

『氣をつけなくちやいけないぜ、何かもくろみやがつたぞ、畜生。』とイグナートフは言つた。

『どうだ、あの駈け出すことは。』

かうして一里ばかり山の方へ進んだ。

『だめだといふのに！』とまたナザーロフが叫んだ。

ハチ・ムラートは返辭もしなければ、振り返らうともせず、かへつて速足から駈け足に移つた。

『だめだぞ、のがすものか！』ナザーロフは急にはつと思つて、かう嗷鳴つた。

彼は遅しい赤毛の去勢馬に鞭をくれて、鐙の上に立ち上がり、前の方へ屈みながら、全速力でハチ・ムラートを追ひはじめた。

空は拭つたやうに晴れ互り、空気は何とも言へないほど爽々しく、その上ナザーロフが遅しい善良な馬と一心同體になつて、坦々たる道路づたひにハチ・ムラートの後を追つた時、ナザーロフの心には生の力が喜ばしく湧き返つてゐたので、彼は何か悲しいことや、恐ろしいことが起り得やうなどとは、夢にも考へなかつたのである。彼は一步毎にハチ・ムラートに近づいて、次第に間隙が縮まつて行くのを喜んでゐた。ハチ・ムラートは次第に近づくコサックの遅しい馬の蹀音によつて、もう間もなく追ひつかれるに相違ないと悟つたので、右手をピストルに掛け、後から來る馬の蹀音を聞きつけて、興奮して來た自分のカバルチャ馬の手綱を、左手で軽く引きはじめた。

『だめだといふのに！』ナザーロフは殆んどハチ・ムラートに並行して、その馬の手綱を握らうと、手を差し延べながらかう叫んだ。けれど彼が手綱を掴むより先に、轟然たる銃聲が響き互つた。

『何をしやがるんだ？』とナザーロフは叫んで、胸に手を當てた。

『みんなこいつをやつつけろ。』と彼はいつたが、そのまゝよろ／＼として、鞍の前橋に突つ伏してしまつた。

けれど山兵たちの方が、コサックよりも先に武器に手を掛けた。そしてコサック達をピストルで

撃ち倒したり、劍で斬りまくつたりした。ナザローフは、戦友たちの周りを駆け歩く馬の首にぶら下がつてゐた。イグナートフは乗つてゐる馬が倒れたので、その拍子に足を敷かれた。二人の山兵は劍を引き抜いて、馬からおりようとせず、彼の頭や腕を滅多斬りにした。ペトラコフは戦友の方へ駆けつけようとしたが、その瞬間二發の弾丸が、一つは脊中、一つは横腹を撃ち抜いたので、彼はまるで袋のやうに馬から轉がり落ちた。

ミュージキンは馬首を轉じて、堡壘さして疾風の如く走つた。ハネーフィとハン・マゴーマはその後を追つたけれど、彼はもうずつと遠く離れてゐたので、山兵たちも追ひつくことが出来なかつた。

もうつかまへられないと諦めると、ハネーフィとハン・マゴーマは、味方のところへ引き返した。ガムザローフは短劍でイグナートフの止めを刺すと、ナザローフをも馬から引きずり落として、一太刀くはへた。ハン・マゴーマは死骸から彈藥入りの袋を外づした。ハネーフィはナザローフの馬を捕へようとしたが、ハチ・ムラートは打つちやつて置けと叫んで、街道づたひに馬を進めた。部下の者どもは、後から走つて来るナザローフの馬を追ひ拂ひながら、彼の後に續いた。彼等がヌーフからもう三里ばかり離れて、米畑の間を走つてゐる時、望樓から警報の銃聲が響き互つた。ペトラコフは腹を割かれたまゝ、仰向けに横たはつてゐた。その若々しい顔は空を仰いでゐた。

彼は魚のやうに喘ぎながら死んで行つた。

「あゝ、實にどうも、何といふことをしてくれたのだ！」ハチ・ムラートの逃亡を聞いた時、要塞司令官は両手で頭を掴みながら叫んだ。「おれの首は飛んでしまつた。逃がしてしまふなんて、畜生！」ミュージキンの報告を聞きながら、彼はかう叫んだ。

警報は到る處に傳へられた。ありたけのコサックが搜索に出されたばかりでなく、歸順してゐる山村からも、出来る限りの民警隊が召集された。生きてゐても死んでゐても、とにかくハチ・ムラートを連れて來たものには、千ルーブリの懸賞が布告された。ハチ・ムラートが部下と共にコサックの手から逃れて、二時間ばかりたつたのち、二百人以上の騎馬の人々が、彼等の搜索逮捕のために、警察長官を先に立てて馬を走らせてゐた。

街道づたひに幾里か走つた時、ハチ・ムラートは汗のために動ずんで、重々しく息をついてゐる白馬を控へて、歩みを停めた。街道の右手には、ベラールチック村の小家や、塔が見えてゐた。左手は畑で、その涯に河が見えてゐた。山に向かふ道は、右手についてゐたにも拘らず、ハチ・ムラートは反対側の左手へ馬首を轉じた。それは、追手が必らず右へ向かふに相違ない、と見込んだか



らである。彼は道のない處を通つてアラザン河を渡り、誰ひとり思ひもよらない街道へ出たのち、その街道づたひに森まで辿り著き、そこから更に河を渡つて、山の中へ入り込むつもりなのであつた。彼はから決心すると、方向を左へ取つた。けれど、河まで行き著くのは不可能だと知れた。彼等の越えなければならなかつた米畑が、ちやうど春のことだつたので、一面水に浸つて、馬の脚首から上まで沈むやうな、泥沼になつてゐたのである。ハチ・ムラートと従者達は、もう少し乾いた所があるだらうと思つて、右へも左へもさまざまに馬を進めて見た。けれど彼等の入り込んだ畑は、一めん出水に浸つたところなので、今でもひどく水気を吸ひ込んでゐた。馬は瓶のコルクでも抜くやうな音をさせながら、ねば／＼した泥土から脚を引き出した。そして五六歩進むと、重々しく息をつきながら、立ち停まるのであつた。

かうして彼等は長い間もがき通した。で、もう暗くなりかかつたのに、まだ河まで行き著くことが出来なかつた。左の方に、島のやうになつた新緑の藪があつた。ハチ・ムラートはこの藪の中へ這入つて、そこで疲れた馬を休ませるために、夜まで足を停めることにした。ハチ・ムラートと従者達は馬からおり、三本足を緩く縛つて勝手に草を喰べさせ、自分たちは用意のパンとチーズで腹を拵へた。はじめ新月があたりを照らしてゐたけれど、それも山の端に隠れてしまつたので、あやめも分かぬ夜となつた。ヌーフには鶯が殊に多かつた。この藪の中にも二羽ばかりゐて、ハチ・ムラ

ートとその部下が入つて來ながら、がや／＼騒いでゐる間は、鶯も鳴りをしづめてゐたけれど、人間の方が静かになると、また互に呼び交はしながら、盛んに鳴きはじめた。ハチ・ムラートは夜の物音に耳を澄ましたながら、われともなしにその聲を聞いてゐた。

鶯の囀りは、けさ水を汲みに出た時に聞いた、ガムザートの歌を思ひ出させた。彼は今いつ何時、ガムザートと同じ境遇に置かれるかも知れない。彼は必らずさうなるに違ひないやうな氣がして、急に嚴肅な心持ちになつた。彼は外套を披けて、齋戒沐浴を行なつた。漸くそれが終はるか終はらないかに、藪の方へ近づく物音がした。それは泥をこね返す夥しい馬の蹙音であつた。目の早いハチ・マゴーマは藪の一端へ駈け出して、騎馬や徒歩の人々の黒い影を闇の中に見透かした。ハネーフィもそれと同じくらゐな群衆を、反對の側に認めた。それは民警達を引き連れた、軍騎兵長官カルガーノフであつた。

「仕方がない、われ／＼もガムザートのやうに戦ふんだ。」とハチ・ムラートは考へた。

警報が傳へられたのち、カルガーノフは百人ばかりの民警とコサックを引き連れて、ハチ・ムラートの追跡に赴いたが、どこにも當のハチ・ムラートはおろか、その足跡すら發見することが出来なかつた。カルガーノフはもう絶望して、引き返さうとしてゐたが、夕方ふと一人の老人に出あつた。カルガーノフは老人に向かつて、騎馬の人達に出あはなかつたかと尋ねた。老人は見たと答へ

た。彼等六人の騎者が稻田の中を跳きまはつたのち、藪の中へ入るのを見たと言明した。彼はそこで薪を集めてゐたのである。カルガーノフは老人を引き連れて、また後へ取つて返した。そして、三本足を縛られた幾頭かの馬をみると、ハチ・ムラートがそこにゐるに相違ないと確かめたのち、夜になつてから藪を取巻き、夜が明けのを待つて、ハチ・ムラートを生け捕りにするなり、首を擧げるなりしようと決心した。

取巻かれたと悟るが早い、ハチ・ムラートは藪の真ん中に古い溝を見つけ出し、その中に立て籠もつて、弾丸と力のつゞく限り防戦しようと思つた。彼はそれを部下に傳へて、溝の縁に土壘を造るやうに命じた。従者達はさつそく木の枝を切り、短刀で土を掘つて、土壘を造りにかつた。ハチ・ムラートも彼等と一緒に働いた。

漸く東が白みかかつた時、民警隊の百人長が藪に近々と馬を寄せて、聲高にかう呼びかけた。

『やい、ハチ・ムラート、いい加減に降参しろー！ こつちは大勢だが、そつちは小人数ぢやないか。』

それに対する答へとして、溝の中から丸い煙の固りが現はれ、銃がかちりと鳴つた。そして弾丸は民警の馬に當つた。馬は一つ跳ね上がったと思ふと、そのまゝ倒れて行つた。それに續いて、藪の周りにゐた民警たちの小銃が、ばち／＼と鳴り出した。弾丸は口笛のやうな音を立てたり、唸

つたりしながら、木の葉や小枝を傷つけたり、土壘に當つたりしたが、その後隠れてゐる人間には命中しなかつた。たゞ主人の傍を離れて飛び出した、ガムザエロの馬だけは手傷を負つた。頭を撃ち抜かれたのである。けれども馬は倒れないで、脚を縛つてあつた綱を引きちぎり、藪をめぐりと押し破りながら、ほかの馬の方へ飛んで行つた。そして若草を血に染めながら、仲間の方へ體を指り寄せた。ハチ・ムラートとその部下の者は、民警隊の誰かが前へ出た時にしか發砲しなかつた。そして、殆んど狙ひを外づさなかつた。三人の民警が負傷した。で、ほかの者は思ひ切つてハチ・ムラートの方へ突進しない計りか、反つて次第に後じさりをして、たゞ遠くの方から出鱈目に撃つ計りであつた。

こんな風にして、一時間以上つゞいた。太陽は立木の半分くらゐの高さまで昇つた。ハチ・ムラートはもう馬に乗つて、河の方へ血路を開かうかと考へてゐたが、その時さらに多人数の新手が押し寄せる、関の聲が聞こえた。それはメフトゥーリンのハチ・アガが、部下を率ゐてやつて來たのである。それは總勢二百人ばかりであつた。ハチ・アガはかつてハチ・ムラートの親友で、一緒に山に棲んでゐたが、その後露西亞軍に移つたのである。彼等の中には、ハチ・ムラートの仇敵の息子である、アフメート・ハンも混じつてゐた。ハチ・アガもカルガーノフと同じやうに、まづハチ・ムラートにむかつて、降参しろと叫んだが、ハチ・ムラートは先ほどと同じやうに、射撃をも

つて答へた。

『拔劍！』とハチ・アガは叫んで、自分も劍を引き抜いた。と、藪の中へ突進する數百人の人氣が、一時にとつと起こつた。

民警たちは藪の中へ駆け込んだが、土壘の蔭からつゞいて幾發かの銃聲が轟いた。三人の者が撃ち倒された。で、寄せ手は藪の縁に立ち停まつて、同じやうに射撃を始めた。彼等は射撃を續けながら、それと同時に、灌木から灌木の蔭へ飛び移つて、ちり／＼と土壘の方へ寄せて行つた。うまく駆け抜ける者もあれば、ハチ・ムラートとその部下の弾丸に倒れるものもあつた。ハチ・ムラートには一發も外れ弾がなかつた。同様にガムザーロも、ほとんど無駄な弾を撃たなかつた。そして弾が敵に命中する度に、いつも嬉し／＼な叫び聲を立てるのであつた。ハン・マゴーマは溝の縁に腰掛けて、『リヤ、イリヤフ、イリヤフ、イリ、アラ』と歌ひながら、悠々と急がずに射撃したが、餘りうまく當たらなかつた。エルダールは短劍をもつて、敵陣へ飛び込みたくて堪らないので、全身ぶる／＼と武者ぶるひしながら、ろくに見當もつけず、のべつハチ・ムラートの方を振り返つては、頻繁に發射してゐた。そして、土壘の蔭から身を乗り出すのであつた。毛むくじやらの、ハネーフィは兩袖をたくし上げて、こゝでも従僕の役目を勤めてゐた。彼はハチ・ムラートとハン・マゴーマが渡す鐵砲を受け取つて、油を溢ませてある紙に包んだ弾丸を、鐵の索條で一先懸命に押し込んだ

り、乾いた火藥を藥池に入れたりしてゐた。ハン・マゴーマはほかの者のやうに、壕の中にちつとしてゐないで、しじう馬の方へ飛んで行つては、比較的安全な場所へ追ひやつてゐた。そして、絶えず甲高い叫びを立てながら、銃架なしに素手で射撃してゐた。彼は眞つ先に負傷した。弾丸が頸に中たつたのである。彼は口から血を吐いて、口ぎたなく罵りながら、べつたり尻もちをついた。續いてハチ・ムラートが手傷を負うた。弾丸が肩を撃ち抜いたのである。ハチ・ムラートは下著の中ベシユメから綿をちぎり取つて、それを傷口につめると、また射撃を續けた。

『劍を抜いて突撃しませう。』とエルダールが言つた。もうこれで三度目であつた。

彼は敵陣に斬り込む覺悟で、土壘の蔭から上半身をさし覗けた。けれどその瞬間、弾丸が命中して、彼はよろ／＼したかと思ふと、そのまゝハチ・ムラートの足の上へ、仰向けに倒れた。ハチ・ムラートはちらと彼を眺めた。羊のやうな美しい目がじつと眞面目にハチ・ムラートを見つめてゐた。子供のやうに突き出た上唇が、開きもせず**びく／＼**引つ吊つてゐた。ハチ・ムラートは、その體の下から足を引き抜いて、じつと狙ひつゞけてゐた。ハネーフィはエルダールの死骸の上に屈み込んで、まだ使はない弾を、チェルケス外套から抜き取りはじめた。ハン・マゴーマはその間しじう歌ひつゞけながら、ゆつくり／＼弾丸を籠めて狙つてゐた。敵は茂みから茂みへ渡りながら、関の聲と共に、次第に近く攻め寄せて來た。また一發の弾丸が、ハチ・ムラートの左の横腹に命中

した。彼は壕の中に横たはつて、また下著から一塊りの綿を引きちぎり、傷口に填めた。横腹の傷は致命的なものであつた。彼も自分の死を直覺した。さまざまの追憶や幻影が、なみ／＼ならぬ速さをもつて、かはる／＼彼の想像に浮かんで來た。彼は自分の目の前に強力のアヌンツァール・ハンを見た。ハンは斬り落とされてぶら下がつてゐる片頬を手で抑へながら、一方の手に短劍を持つて敵と闘つてゐる。かと思ふと、狡猾らしい白い顔をした、弱々しい血の氣のないブロンツォーフ老人を見、その柔らかい聲を聞いた。それからまた息子のユスーフと、妻のソフィアートを見、赤い鬚を生やして目を細めた、敵のシャミールの顔を見た。

かうした追憶が、哀憐も憎悪も、希望も、何の感情をも呼び醒ますことなく、彼の想像を流れすぎた。これらすべてものは、彼の内部に始まつてゐるものと比較すると、實につまらない取るに足らぬもののやうに思はれた。とはいへ、彼の力強い肉體は、一旦はじめたことを續けた。彼は最後の力を振るつて、土壘の蔭から身を起こし、自分の方へ駆けよる男に向かつて、ピストルを放した。彈丸は命中した。男は倒れた。やがて彼はすっかり壕の外へ出て、重々しく跛を引きながら、短劍を手持つて、眞つすぐに敵の方へ向かつて行つた。いくつのか銃聲が響いたと思ふと、彼はよろ／＼となつて倒れた。四五人の民警が関の聲を揚げながら、倒れた體に飛びかかつた。けれど彼等の目に死骸と見えたものが、急にむ／＼と動き出した。はじめ帽子のない血みどろの坊主頭

が持ち上がった。續いて胴體が起きた、最後に彼は立木につかまりながら、ぬつくとはかり起ち上がった。その形相がいかにもの凄かつたので、駈け寄らうとした人々は、思はず足を停めた。けれど不意に、彼の體がぐらりとしたかと思ふと、ふら／＼と木から離れて、まるで刈り取られた薊のやうに、顔を俯向けながら棒倒しに倒れた。そして、もうそのまゝ動かなかつた。

彼は動かなかつたけれど、しかしまだ感じはあつた。まづ第一番に駈け寄つたハチ・アガが、大きな短刀で彼の頭に斬りつけた。彼はまるで金槌で頭を殴られたやうな氣がして、誰が何のためにこんなことをするのか、合點がゆかなかつた。これが彼の體に關聯した最後の意識であつた。それ以上はもうなんにも感じなかつた。そして敵は、もう彼と何の共通點も持たないものを、踏みにつたり、斬りさいなんだりした。ハチ・アガは死骸の脊中に片足をかけて、二打ちに首を打ち落とし、靴を血で汚さないやうに、そつと足で轉がした。首の動脈から噴き出す眞つ赤な血と、頭から流れる黒い血が、忽ちあたりの草を染めてしまつた。

カルガーノフも、ハチ・アガも、アフメイト・ハンも、すべての民警たちも、仕とめた獸に集まる獵師のやうに、ハチ・ムラートとその部下の死骸を取圍んだ（ハネーフィと、ハン・マゴーマと、ガムザローは縛り上げられた）。そして硝煙に裏まれた藪の中に立つて、たのしげに語り合ひながら、自分たちの勝利を祝した。

トルストイ ハチ・ムラート 養徳堂書 1026  
米川正夫

譯者略歴

明治二十四年岡山に生る。東京外語露語部を卒業、大蔵省・ロシア領事館などに勤む。ドストエフスキ全集、戦争と平和などの譯書多し。



ハチ・ムラート  
〔定價 130 圓〕

昭和 23 年 9 月 10 日印刷  
昭和 23 年 9 月 15 日發行

譯者・米川正夫

發行者・東井三代次  
奈良縣丹波市町川原城  
會員番號A 125015

印刷製本者・若林吉郎兵衛  
京都市右京區太秦上利部町  
大日本印刷株式會社

發行所・株式會社 養徳社  
本社 奈良縣丹波市町川原城  
振替口座 京都 25648  
京都市中京區錦樂區通室町西入

15051

射撃の續いてゐる間、しづまりかへつてゐた鶯は、再び勢ひよく囀りを立てはじめた。はじめ近くで一羽が鳴き出すと、やがて遠くかなたの方で、幾羽か聲を揃へて歌ひ出した。  
かの鋤き返された畑中で、無慙にひしがれてゐた薊が、わたしに聯想を喚び起こしたのは、つまりこの死に他ならぬのである。





終

